

八二高地の

激戦を偲ぶ

歩四七ノ一二

歩兵少尉 倉迫俊男

十二年十二月十日正午、南京城を去る東南約二里李家湾に到着しました。千米位前方で猛烈な戦闘が繰返されおるらしく、此附近まで跳弾がアルン／＼と無気味な音響をたて、飛んで来ます。

自動車で昨日先発した人々も皆此處に集つてゐる。昼食後の十五分ほど夕食の飯盒炊事をします。超スピードの飯盒炊事です。ぐたく／＼とたぎつてゐる泡沫のまだ消えぬ半煮の飯盒を手早く背袋につけ、毛革が焦れはしまいかと心配しつつ、諸々松林の點

在する小山を幾つもく／＼鍵小様にしながらグル／＼廻つて凹地の一軒家に集結しました。

寒いながらも感じて空を見上げれば、白輪が西に傾いて西寄の竹藪で一匹の雀が圍く／＼となつて、あの真圓い眼を見張つて、首かしげながら私達を見詰めてゐます。

ドガ／＼と続けさまに火音響が眼の前で起り、閃光が網膜を覆ふ。藁を冠つて伏してゐた兵がどつと一度に飛上つた。敵の砲弾が集結部隊の真中に命中したのです。

「此方に来い」と首藤中隊長殿が小高い丘にかけ上つて、部隊集結の指揮をして居られる。

兵が分散の隊形をとつて小隊毎に集結した。敵砲弾は生きもの、様に小面憎く正確に、私達の頭上に降り注いで来る。中隊の兵も四五名やられた様です。だが続け様に

敵砲弾が炸裂するので傍りに寄り付けな
有田衛生兵が負傷者を引摺って堆土の蔭に
入つては 又粟鼠の様な早さで飛び出して
收容する 勇敢に自己の職務に身命を捨て
てかゝる彼の姿は神だ 人間術とは思へま
せん

「有田がやるの！」

首藤中隊長殿がジーツと彼の姿を見つめて
居られる その两眼には感謝の涙が光つて
おました

午後八時江島虎雄少佐殿(当時大隊長)よ
り 八二高地夜襲の命令を受領しました
空には月なく星がざら／＼光つて 十米先
の物体は影法師の如く 黒くぼんやりと見
えるだけでした

首藤中隊長殿は部下を谷間に残して 自分
一名を伴つてゴソ／＼叢を匍つて一寸小高
い丘に出た時 五十米位前方の高地から

バツ／＼とチエツツ機関銃の射撃を受けま
した 火柱が目の前を横切つて 斜に後方
の谷間の岩石に火花を散します

「中隊長殿 私共を射撃したのでは無い様
ですわ」

「敵は我々が谷間から来ると思つてゐるの
だ あれが八二高地かなあ 案外低い様
だわ」

中隊長殿は暗をすかしながら 小声で首を
傾けて居られる

「あの饅頭型の様なのは皆トウチからしい
ですわ ほう饅頭から火焰が出た」

こんな會話が暫く続いて 敵陣地の情況は
次々に手に取る様に 詳細に偵察されたの
です 晝間だつたらこんな目と鼻の近くで

敵陣地偵察など思ひも寄りませんが 夜
間の星明りと来てゐるので 萬事好都合で
した 午後八時四十分首藤中隊長殿が真先

0690

に鉄條網に潜りこんで深い崖から這ひ上つて行く。部下の一人くを引上げて鉄條網内に入られる。がサ／＼と枯薄の餌水合ふ音が、いやに神経をそ／＼つて、敵に氣付かぬはせめかと氣が氣ではありません。丁度この前後から風が吹き始めたので、先づ安心です。敵砲彈が左後方の谷間で猛烈に炸裂して、破片がフルン／＼と身边に飛びます。時松中尉の率ゐる一隊が、がサ／＼と八ニ高地の最高峯に向つて匍ひ進み、首藤中隊長は抜かして山添小隊の先頭は立ち、勿を一閃、最左翼陣地目懸けて突入される。が／＼／＼、この音を、手榴彈の炸裂の音だと、意識して突入した者は一人もない。只無我夢中に高い崖を這ひ上つて、刀を無茶苦茶に振り廻しました。足場が悪いのか、體がぐら／＼して、山から谷底へ轉け落ち

そうです。敵が眞黒になる程押寄せて来ます。敵と距れを居ると手榴彈のお見舞を受けようなの、群がる敵中に飛び込んで行く。今迄より一層無茶苦茶に刀を振り廻します。敵兵がどつと蹴落される様に谷間に逃げこみました。右中雨突密隊の方向でも、カツ／＼と剣と剣との摩擦する音が、烈しく聞え、敵か味方が呻吟する声が高い。死闘十分、勝敗は決しました。然し首藤中隊長も山添小隊長も、共に倒れられました。時松中尉の奪取した最高峯地点が氣がかりです。私は水口軍曹と共に最高峯地点に急ぎました。途中散兵壕内には、敗残兵がウヨ／＼しておました。それを隊備隊の兵が、「こん畜生」と叫びながら、らみつぶしに殺して行きました。時松中尉は八ニ高地の最高峯に胡坐をか

電燈の煌々と燈った遙かにかすむ南京城を眼下に見下しておました。私は時松中尉の手をひしと握った。そして中隊長殿山添少尉の負傷を傳へた時、「又、私とあなたと二人残りましたね。」と頑張りませう。と彼は私の手を求めた。二人は南京城を眼下に彈雨の中で固い握手を交したのです。

「南京城を一番先に見たのは第十一中隊だか。頑張り。」と兵を激励しながら一生懸命に壕を掘りましたが、岩石地である為め円匙かわけかやされ、一握の土がとうしても掘れません。

此の時敵は又闇を縫つて大擧して八二高地奪還に逆襲して来ました。軽機かけた、まじく火を吐き手榴弾が一尺四方に一個位の平均で雨の様に降つて来る。退退しても専退しても執物に襲ひかゝつて来るのです。砂箱に集る蟻とはこんなときの形録詞でせ

う。兵の雄叫びも手榴弾の音で聞えませんが、鼓膜がかん／＼鳴つてゐるだけです。四圍の煙幕と土煙で自分以外何んにも見えません。否、自分自身そのものが既にないのだ。只無中になつて其處等あたり附近にあるものは、何んでも手當り次第に投付け、体につつかゝつて来た者は斬る突すだけなのです。

軽機関銃も擲弾筒も歩兵部隊の虎の子とも言ふべき重火機は皆な冲天に吹き上げられて、使用出来得るものは何一つありません。あるものは只八二高地を奪還されれば、互に戦友の靈に申訳がないと言ふ事と、チヤンコロに敗けて日本軍人として面目が立つかと、言ふ精神力のみでした。時松中尉も負傷しました。初めは地物から地物へと隠れて近接してゐた敵は、今は我兵僅少と見て、ノコロノ大膽に立上つて攻

寄せて来る。然しもう弾丸がない。工、ま、よくと舌打ちして見ても弾丸運びをする兵がいないのです。中隊三百名が傷つき倒れ今は僅か二十四名。グルリと圍陣を畫いて一つの窓にかじり付いて。敵が手の届くところに接近したら。飛びか、うて咽喉笛に噛みついてやろうと。狼の様に目玉を光らして獲物を待つて居るだけでした。南京城内の電気の光が眼に沁みこむ様です。おう。この水が光の世界の見納めだ々と口にこそ出さないが。皆一様に感じたこととせう。敵も攻めあぐんだが。手榴弾の投擲に間断が出ました。おい。十二中隊が来たぞ。と後方で叫ぶ声が聞えます。おう。増援が来たか。皆は顔を見合せました。手榴弾がよかつた。

「八二高地を守り得た。と云ふ安堵と。責務を果し得た時誰でも感ずる。あの快感とが一時に壇を切つた様に沁み上げて。知らず知らず赤土で真黒に汚れた顔を。歡喜の涙が待つて流れました。おい。小深田さん有難ふ。よく来てくれ。たね。私は小深田幸生准尉の手を押し戴く様にし。て言ひました。お、大變だつたね。敵情はどうだ。と氣軽るに言つた時。二人の間に。どかん。と一発の手榴弾が飛んで来ました。あの通りだよ。二人は地に匍ふつくはつて顔を見合せた。論より證據か。君の中隊は左を頼む。彼はムクムクと体を起して。さつさと前線に出て行きました。中隊の兵が増援隊の兵から。手榴弾を一発宛貰つてはつとした様を

顔をしてゐるのも憐れでした。中隊長殿が先刻からしきりに私を呼んでゐると言ふ私は心せくまゝに戦死傷者の位置に駆けつけました。

「皆な死んでもこの地を頑張つてくれー」

澤山部下を殺したなあ、さうすまな、首藤中隊長殿がぼろぼろ涙を流して、壕底にうずくまる様にして言はれました。

「中隊長殿、もう大丈夫です。増援隊が来ました。安心して下さい。無理をなさらないようにして下さい。もうすぐ收容部隊が来るから……」

「もうですか、もう行つて下さい。くれぐれも後を頼みますよ。」

何んと温情溢れる。かして悲壯な最後の命令でありませう。

時松 山添 佐々木の各小隊長も霜の降り積む石ごろの上に横臥させてある。済まな

あれ程勇戦に闘つてくれた人々を、こんな寒天に何時迄も置きつけなして置いて、だが情況は急、心で泣いて握る円匙に力を入れた土を起し壕を深めました。

空には如時か下弦の月が青白く照つて、夜明けの星が一入り光を強めてゐる。腕に八十人師の標識をつけた敵兵の屍が、其處等一面に山の様にころがつかつてゐます。彼等は蒋介石の親衛隊ださうです。

道理で強かつたなあ、相手に取つて不足のない奴だつたかと勝者の誇りを感じました。

肉弾を奪ひ、八二の嶺

歩兵四七ノ一

歩兵隊長 佐々木茂八郎

南京へく 上海平源の最後の要害崑山を
叩き潰して 我が神速の健脚部隊は疾風宛
然結葉を巻くの慨を以つて 太湖の南側に
現れ出した 新なる機動作戦 敵國首都に
向つて突進又突進に移つたのです
絲綢関の大関門を突破して敵の右翼に轉回
暗の總攻密に参加したのびす かくて十
二月十日牛首山に連繫する 八三高地の天
嶮に肉迫することになりました 午後九時
首藤中尉殿の卒ゆる決死の面々塹壕より道
ひ出して 鐵條網の破壊口へと進みます
今宵が最後か 見上げる空には 寒月
皎々と輝やき 迫る砲弾が青白い焰を引い
て乱れ飛びます
月光輝く高地を大刀振り上げ進むは首藤中
隊長です 時松中尉殿の卒ゆる部隊がトッ
チカ高地に進み手榴弾の雨だ 敵中央の
チエツコ機関銃は狂ふが如く吠ゆるが如く

敵が得意の盲目毒も決して馬鹿になりませ
ん 中央火熱は自分です 眞ッレ 銃手は
機関銃を敵銃眼に突きこんで暴ち始めまし
た 目前の塹壕を眞黒になつて逃けて行く
高地に太刀を振りかぶり敵石の敵とわた
り合ふのは 向軍曹です
成功だ 奪つたを 第二小隊は現在地確
保し 自分は大声で叫びました
ホーンと目の前の凹地に敵の信號彈が上
りました
逆襲だ 迫る砲の射束と連垂して
どす黒い一團が前方から 右から左から此
の高地に向つて押寄せて来ます
手榴弾を用意しろッ
機銃が火を吐く どす黒い一團が高地の脚
で伏せる ドゾク ドン手榴弾の雨です
機銃の一つが空中に舞ひ上ります
「チヤンコロ 来い」と一人機銃にしが

みついで射つは本田上等兵

砲煙と土煙の中は兵は装填する暇もありません。第一回の逆襲に続く第二回目の逆襲

敵の手榴弾は降る様です。頼む機関銃も

本田上等兵と共に吹き上げられました

午後九時三十分下弦の月皎々と高地を照し

開けるものは敵手榴弾の炸裂と。第一線小

分隊長の声のみです。鮮血にまみり尚銃を

執りて防戦するもの「死すとも高地を下る

な」と大声で叱咤する分隊長。負傷の身も

打ち忘れ「奪れた」と狂喜する兵。斯

くして死闘二時間。反復五回に及ぶ逆襲を

退還。手兵僅か二十四名となり遂に南京城

内部防禦要塞線の鎖輪たる八二高地を完全

に確保したのであります。これこそ道感を

き。中隊の團結の威力の発揚であります

南京今や手に入りて砲声遙く聞える時。生

き残る將兵二十四名の双頬に。感極つて熱

涙の止めどもなく傳るのをどうすることも出来ませんでした

手榴弾の雨を縫ふて

歩兵四七ノ一一

歩兵伍長 上田政人

安徳門より約五〇〇。其の左方八二高地附近は敵正規軍の演習地で各所に掩蓋トーチカを設け。屋根形鉄條網は二段三段に張り廻らしてありました

十日の午後三時四十分。中隊は攻串位置に進出しました。敵砲弾は前後左右に落下します。「危い」と言ひもあえず。土煙の下にばつたり倒れた兵を見ました。倒れと。其の瞬間脱兎の如く駆け出して。倒れ

0696

た兵をしつかと抱き上げ、轆轤に似て凹地に駆けこんだ勇士があります

小隊長代理の佐々木軍曹殿でした。しかし折角の救出の甲斐なく、兵は既に染血にまみれ息は絶えておりました

「よし、仇は俺が討つてやるぞ」と、毅然と言ひ散つた軍曹の一言は私共に強い感銘を與へました。今日の前で見た勇敢な行動と、噴怒に燃ゆるこの一言は、百萬言の訓示にも勝り、「よし、やぶぞ」と一同は奮ひ立ち、もう炸裂する砲弾も物のかずではありません

決死夜襲の命令は愈々私共の闘志を鼓舞しました。小隊長を取り圍み、決死を誓ふ水盃を交し、愈々突入の機を待ちました。中隊長を先頭にちり／＼と鉄線網に迫る。折柄の弦月は行動に便利ですが、鉄甲を照し、剣光を光らすうろたへがあります

敵前三十米、早くも悟つた敵は各所の掩蓋より一斉に火を吐きました。手榴弾は文字通り雨霰です。隊長の突込めの合圖と共に、無二無三に吾邊れじと突入しました。彼我入られ、乱闘、精魂の続く限り、腕も折れ、と突いて／＼突きまくりました

突番は見事成功しました。障地は確實に占領しました。然し、首藤中隊長を失ひました。次ぎ／＼に繰返して手榴弾を雨と投げ、逆襲の爲めに、戦友の多くは傷と倒れ、時松少尉殿も手榴弾の爲め足を碎かれ、遂に中隊長殿始め三名の小隊長殿も倒れられた。残るは急迫進尉殿以下二十四名、一人に存るまで頑張り、敵団に亘る逆襲を叫び死となつて防戦しました

八二高地に握飯を運ぶ

歩四七ノII大行李

輜重兵上等兵 河上一郎

私は当時長以下四名で速射砲に配属になつておりました。常に第一線について行く関係上、歩兵の人達が勇しく働くのを見、又内地から激勵文等貰ふ度に、残念では方がありませんが、丁度南京攻惠の時、八二高地に不眠不休で悪戦苦闘を続けてゐる友軍に握飯を運んだことがあります。

この時始めて自分の任務が重く、大事であるかを痛感しました。そしてそれ以來第一線兵士が羨しいなどと言ふ、心持ちが全然なくなりました。

さて、小隊長植木静夫准尉殿が、前線は飯

も食はず、飯じいだらうから、飯を炊いて届けてやれ、と言はれ、ました。此の一帯は少しでも煙を上げると、直ぐ敵の砲弾が飛んで来て危険でした。

然し苦戦苦闘を続ける戦友のことを思ふと、そんなことは言つて居られませぬ。

早速、佐藤善和太二等兵と三人して、ひどく濁つた汚いクリークの水で米を洗い、クリークの傍で炊き始めました。案じた通り敵砲弾は煙を目当に頻りに飛んで来ます。飯にはエキスと芋を入れました。幸ひ無事

に出来ましたので、握飯を作り、石灰罐に詰めました。丁度其時、速射砲の吉田武士伍長が連絡に来て、これから指揮班に歸ると言ふので、歩兵にも加勢して貰つて一人一個宛罐を持ち、用意の手榴弾も携行して出かけました。

途中敗残兵に注意しながら、壕の中を進ん

て行きますと 未だ死にき止め敵兵が澤山
居ります 弾丸は遠慮なく頭上を掠める
氣の毒なのは友軍の員傷者です 彼方此方
に未だ収容しきれずに横たはつておます
その中に漸く八二高地に辿り着き 糧飯を
交付しますと 皆もう涙をぽろ／＼流して
泣いて喜ろこんでくれました まるで拜む
様にし感謝してくれるのでした
私は任務を完遂出来た喜びと同時に 自
分等の任務が如何に重大なるものであるか
を沁々と感じました

八二高地の想出

歩四七ノⅢ 座談會

◇ 遠藤軍曹日(九中隊)

南京城の手前八二高地攻奪の時 自分の小
隊は大隊豫備隊として大隊の後方で 第十
一中隊攻奪成功の報を 固唾を飲んで待つ
ておました

さすが敵は軍官學校出のチヤキ／＼ 然も
装備の點から言ひましても せこらの支那
軍とは桁が違ひます 此の銃砲聲の激しさ
は 戦陣の激烈を如實に物語つておます

漸く該高地占領の報告を聞いた時は 首都
防衛の主要なる一據點をなしてゐただけに
鬼の首でも取つた様な喜びでした

死傷者が多いとのこと豫備隊が収容に行
きますと 左腕を貫通された兵が

「隊長殿がやられておます 隊長殿を何卒」
と言ひますので それではと擔架を隊長殿

のところに持つて行き

「隊長殿 擔架を持つて來ました どうぞ
乗つて下さい」と申し上げますと

「自分は軽傷 志は感謝するが 自分より重傷者を乗せてくれ」といつか聞き入れられませんが、斯の隊長にして斯の部下ありと其の高潔なる心情に 一服の清涼剤にも似た魂の洗濯をしました

井上隊長

首藤大尉は人格圓滿 而も部下愛の至情に徹せられ、殊に氣持のよい人でした。この話は私達の語り草です。たしか殊勲甲に申請されてある筈です

◇ 山際中尉 (H.M.G.)

自分は中等學校は東國東の農學校で首藤大尉の教へ子です。召集令狀が参りました時、真先にかけつけて、先生参りましたと喜びを領ち、色々と祝つて頂き又教訓を頂いたものです。その先生が戦地に來られ、然も

同じ大隊の第十一中隊と聞き、何処迄奇くしき師弟の縁かと早速はせつけ手を握りしめて一死報告を誓ひ、武運長久を祈つたものです

南京に向ふ三日前のことと思ひます。先從で私の小隊が行動を起し十一中隊のをばき通りますと、先生は兵を棄めて愛國行進曲を合唱して居られました。あゝ先生は相夷らずやつておられる。と一寸涙ぐみうな気持ちになりました。歌の終つた先生が私の敬礼をかへされながら「もう行くのか、お前はいいのう、馬に乗れるから」と言はれ、後は笑ひに紛らはされましたが、その言葉が妙に胸につかへました。後で聞くと先生は馴れない行軍にすつかり足を痛められ、豆が七つも入つても出来ぬものを、こつくり衛生兵に治療させ、若し兵士の先頭を南京へくと行軍された

0700

245

もうび 八二高地で負傷されて内還になら
れたが 先生の爲真を前にして どうして
あの時馬をくれ と言はれなかつたのかと
泣いてくやんだこともありす

◇ 猪部軍曹 (三M G)

今中隊長殿が話されました様に やはり自
分も恩師でした

兼わて自分か學校に行つた時 先生は在郷
中 中尉に進級され その記念にもと軍刀
を買はれ 「俺はこれを持つて戦争に行くん
だ」と老の赫顔に血を上らして 唐竹を斬
つて見せられました

先生が来られることは崑山で知りました
早速おたづねすると 丁度先生は公用行李
の整理をして居られましたか 「やあ 主か
と言はれ色々御馳走になつたよ お互ひう
んとやろう」と學校の名にかけてはげま

されました それから二三日して道でお會し
た時は軍歌を教しえて居られた時で 自分
にも軍歌の紙を一枚下されて 何時でもよ
いから唄へと言はれました 早速其の紙を
一緖に入れて學校に知らせやりましたか
恩師と戦地での再會 色々感慨が深くあり
ます

佐古少尉 (M G)

当時自分は一小隊長をやつてをりましたか
十二中隊が八二高地を占領して 愈々南京
攻塵をやるやうになつて 機関銃も之に協
力することになりました
十三が右 二十三が左から攻塵しておまし
たか 雨花台から盛んに砲弾が飛んで来まし
た その道では一二大隊が戦闘しておまし
たか 中隊長の号令一下 忽ち一斉射塵を敢
行しました その時は小隊は右の方で射塵

をしておりましたが砲弾が盛んに弾薬小隊に
落下します 危険の上もありません
それで 白井 長野軍曹が各分隊を率いて
前方百米の高地に進出しました その時前
に二三発落下しましたが もう先刻の様に
に來ませんでした これでほつとしたので
すが 戰術的にも操典にある様に 一地に
長く停滞するの非をつくぐ感じたのであ
ります

八二高地より

安徳門まで

歩四七ノ一二 座談會より

◇荒金中尉

十二月七日其の白も又南京めざして猛行軍

でした 夕方前方からの通傳に依りますと
南京城は既に他師團が占りかけて 自分達
は間に合はんとのこと 泣いても泣き切れ
んとはこのことです

戦死した部下も買傷した部下も皆うは言の
様に、南京ノ南京ク と言ふておました
八日遂に自動車が来て 師團の命令で軍旗
と聯隊本部だけ先行しました 私共も間に
合はんと思ひ殆んど走る様に急いでますと
夕方自動車で行くことになり 應善橋と言
ふところまで行きました

其處で大隊長殿の指示を受け、牛首山
將軍山を占領し 愈々聯隊は南京城攻塵に
参加することになりました
十日の朝應善橋を出発し第一線に來ました
鉄心橋に着くと野砲が放列を布いて盛んに
射つておます 祖國迄届けこの世紀の黎明
を 南京城は指呼の間にあります 私達の

0702

247

腹はずつかり出来ました。師團は右に十三
聯隊左に二十三聯隊を第一線とし、既に攻
害しておきました。が聯隊は中間にはめて貫ひ
一斉に攻害、頑強に抵抗する敵を一步々
排除しつゝ、安集寺院のある高地まで辿り
つきますと、程なく聯隊本部も参りました
そこで攻害開始の要旨命令を聯隊長殿より
受け、それ依ると中隊は光榮の右一線で
した。右の溜に登つておた中隊は攻害を開
始すべく、山を降り竹藪の方に入つて行き
ますと、敵の砲弾が一発落ちて、大砲砲弾
の洗礼の第一發を受けました。
それで此角に入らんとしました時、直後に
第二彈が落ち、これは十一中隊が吹き飛
びました。私達は幸に砂をかぶつただ
けでした。其處で命令が降り、中隊は豫備隊
となり、大隊本部の位置まで退りました。
それは十日の夜でした。

第十一中隊は右一線となり十日の九時頃
八二高地を夜襲すると勢ひこんで出かけま
す。一同成功を祈つたもので、豫備隊と
なつてどつと連日の疲勞が出たものか、兵
隊達は此の大事なとき、然も弾の中で
ウツラ／＼としておます。祖國の名に賭け
て、陛下の股肱をあづかる隊長として、あ
どけない部下の巖姿に胸がつかまるものがあ
りました。
殺氣漲る戦場の一角でそんな感慨に耽つて
ゐると、大隊命令で將校百餘を出せと言つ
て来しました。任務は十三聯隊との連絡。早
速、立花少尉に行つて貰ふことにしました。
その晩は寒天に眉毛の様な月があり、鉄兜
が光り射毒を受けました。一人も負傷せ
ず無事に歸つてくれました。
十一時頃十一中隊の倉迫准尉が
中隊長以下戦死傷者が多いから増援に来

ていれ」と言ふて来ましたので、各小隊に命令を與へる暇もなく出て行きました。そして八二高地逆襲の敵を攻撃し奪取し朝まで確保したのですが、奪取して警戒區署をさづけて間もなく聯隊長殿と高木副官殿が来られ、非常に激勵感謝の御言葉を受け、十一中隊の將兵に對し心苦しく思つた程でした。八二高地は地形から見ても陣地の恰好から考へても、首都防衛陣の重要據点です。敵も死命を削せられろと思ふてか、拂曉と同時に逆襲に移り陣地直前に来ては手榴弾を投げる。無論、断じて負は取りませんが、その度に一人二人と部下が斃れます。怒髪天を衝き悲憤に燃ゆるとはこのこととせう。幾度か軍刀を振りかぶつて出惠しやうとして部下に抱き止められました。そうしてみると隣りの二十三聯隊から

「前の安徳門の陣地を占るか、貴隊に於てあらんなら二十三聯隊で占ると言ふて参りました。武士の意氣地にかけて占つて見せると鄭重に断り、一同更に禪をし物なおしたものです。当時中隊は僅かな兵力しか居りません。殊に第二小隊長は負傷して山を下り、小深田准尉が突惠隊長として代理を務めてゐると言ふ現状でした。中隊は決死的な覺悟で、九となり百歩先の敵に突惠を敢行。味方の勇猛果敢に恐れをなしたか、敵は固章狼狽して潰走するので勇を鼓舞され突込みました。輕機銃の射手としての岩倉軍曹の奮戦振りには突に見事なものでした。今考へますと此の時の戦陣は全く無我夢中で、指揮にしろ掌握にしろ秩序立つてゐませんが、武士の意地と言ふあの氣魄でやり通しました。

◇岩倉軍曹

八ノ高地の戦開の時は皆決死でした。どう
せ死ぬなら華々しく、そう思つてやりま
した。それで側射なんかに顕慮する者もな
く、あれで負傷したり戦死したりしたりし
た者が多かつたやうです。中隊の戦死傷二
十四名だつたと思ひます。

◇荒金中尉

今の話で自分が無中になつて助つた話――
道の台上に居つて指揮しつゝ前進しておま
すと云はば居つた藤川軍曹が「隊長殿、危
い」と壕の中に引摺り込みました。今暫
しでチエツコの掃射で体は蜂の巣を伴ふと
ころでした。

◇藤川軍曹

隊長殿の後から走りつゝふと側方に服をや
りますと、チマンがチエツコの引金を將に
引かんとしてゐるので、隊長殿と滑り込
む様にし、壕の中に入り助りました。昼開
の白兵戦は始めてでした。永岡軍曹が猛烈
な勢いで突込んで行き、見事に首級を上げ
てゐる様子が勇壯なものでした。
安徳門の道路に來ますと溢路口がありそ
からチエツコで射つてました。下らうとす
ると危い。左の小川の傍いところには籠こ
んでひまひと上を見ますと、チマンが頭を
上げたり下げたりしてゐます。壕の中に入
つた組が壕に滑ふて敵を刺し殺してゐまし
た。負けてゐるものかと大事にしとゐた最
後の手榴弾をぶつつけて突込んで行きました。
たが、あゝ、なると精神的にも吾等の勝利で

實際もろいものです

◇荒金中尉

安徳門の突進を敢行し敵を退退して間もなく、小行李の兵が水筒を一人び十本位持ち、煙草乾麵包並持って来てくれました。自分と小深田准尉が穴の中に入って休まうとして、わろと兵が「危い地雷」と叫びます。それでこれも危いところを助ります。思へば随分危険なこともあり、又自分も無事と居られるとは思ひませんでした。之程痛快な戦闘をしたことはありません。した。七八百の敵中に僅か七十名足らずで突込んで行く。而もそれが白晝です。雪崩を打って真黒になつて逃げろ敵を軽微。敵関銃の掃射ですから耐りません。將士倒れに面白く倒れ行くのです。小深田准尉など鉄甲もかぶらず、ねが鉢巻と古小唄の

意気地でした。南京々々と言ふて来た人だけに、安徳門を占つた時はもうをて本望だと、叫ぶ萬歳も嬉しなめで、裏りました

◇岩倉軍曹

あの萬歳を叫んだ時、胸に抱いた戦友の遺骨を握りしめて、新しい日本の歩調と勝鬨を聞かずに、祖國の發展を信じこんで、々と死んで行つた奴の面影が、心にはつと眩へ花開いて唯もう胸がつまり、血涙滂沱としてほふり出づるのを禁じ得ませんでした。自分は眼を開きました。

戦友は人間を純化します。感激の涙と喜びの涙とが波の様に繰返さぬです。それか皇軍の戦心と思ひます。私はその涙の中に皇民われらの美しい傳統を深く思ひました。

安徳門

決死の兵糧運び

歩兵四七ノ班大行李

輜重兵一等兵 大石 某

安徳門攻番の時自分は第十二中隊配属でした。歩兵は八百米位の壕の中に盛んに戦闘してゐるのですが、食料を運ぶにも余り弾が来るのが行けません。

行く者は前面の稜線が必ずやられるので、何回もかの後援飯と水を運ぶ決死行動を第一班長以下私共四名がすることになりました。水筒に水を入れ握り飯や食料を背に負つて稜線近くに来た時、敵兵が五六名走り寄つて来ました。班長殿は敵の中に躍りこ

んで一人を斬り殺しました。其の際に稜線を無我夢中で越して十二中隊に辿り着いたのですが、小深田准尉殿等は「明日は陥ると向ふ鉢巻の勇しい姿でした」

荒金中隊長殿も「とで助かった。まあ水を一杯飲ましてくれ」と言はれました。皆の舌がこぶ顔を見て、自分の命賭しました。仕事は報ひられた様な気がしました。

歸る時は前後左右に迫る砲弾が塵を上げて、土を一杯かぶりました。その附近には手榴弾が轉つてゐるので、之に踏くと命が無え。こりやこめえ、こうちやねえ、と思ひました。

其處に十一中隊の兵隊が負傷してゐました。自分等を見ると「少しでもい、から水を飲ましてくれ」と言ひますが、自分等も其の時は少しの水も持つて居らず、非常に気の毒でした。

▲砲も吹飛ぶ▼

歩四七 本部 宮崎曹長

南京を攻撃することになり 昭和十二年十月十日四顆松の南方より前進して 聯隊砲を丘陵に引上ることになりました
自分は観測手を連れ丘の中腹まで来ると 敵砲彈の集中射撃を受けました
そこで遮蔽して砲車の来たるのを見てゐますと 砲二門来る中央に一発落下して 土煙と共に吹飛ぶ砲車を見ました
続いて三発四発敵砲彈が其の附近に落下して蒙々と土煙りが上つてゐます
兵隊は誰れも動くものはありません
「全部やられた」と思ひました
小隊長級に報告しても「ウン」と言はれた

「今行く」とやられるが 伏せろつと
と言はれたので伏せた瞬間 どがんと一発私共の傍らに來ました
然しどうも砲車と其のことが氣になるので 砲彈の中を這ふ様にして行きました
行つて見ると一名戦死して十七名負傷してゐます
之を四名で丘の麓の陋家まで運び 原本軍医殿に依頼して 再び砲車の位置まで行きました
その時は砲彈も前程来なかつたので 一門は分解して持つて行きました
たが一門は駄目でした
南京攻撃の損害は我が小隊で戦死四員 負傷者は自分以下二十一名でした
当時の状況を思へば感慨無量です

小隊長殿 笑つて一死にます

歩四七 正大隊本部

歩兵軍曹 大戸寛次

昭和十二年十二月十日 漸く彈雨飛交ふ第

一線然も敵首都南京散料に迫つたのです

先着の友軍部隊の展開線に着くまでは無

気味な程に沈黙の中にも 時々高い流弾が

頭上を飛去つておました 硝煙の香も消え

やうな敵の交通壕を傳つて 愈々第一線に

着いた時は冬の陽も未だ高い頃でした

敵偵察の爲め威嚇射撃をしますと 見え

ぬ敵から反対に狙撃され一名の戦死者を

出しました

殺線より目だけ出すと未完成らしい トウ

チカが赤禿に化した山肌に見え 見えぬ敵

の蠢を感じます。早稲刈食を終へ夜襲の命
令が吾十中队に下つたのは薄暮前でした
各分隊毎に背囊を組み夜襲準備の軽装にな
つて「彼のトウチカを占領する」と言はれ
た時には、今夜こそはと生還せざる覺悟
を決めました

「右より第六 一 五分隊第一線 第二

三 四分隊第二線 第一分隊より逐次前

進の命が下ると同時に次々と稜線

を越えて行きました 死角に入り早駆に移

つた時地雷にかかりましたか幸損傷は少な

く 續いて一殺線越えて愈々敵陣に迫りま

した 歩一歩山の形其儘の陣を逐次山頂

に向つて狭めて行く 満月には少し早い月

が 剣先を青白くきらめかしてゐます

敵前五十米 突撃の準備が出来た時に中隊

主力及第二 三 四分隊と連絡が切れたこ

とを知らせました 小隊長三重野中尉殿の命

する突撃部署につき 敵前の鉄條網破壊の
爲め 江藤上等兵以下三名の破壊班は 匍
匍前進を開始しました 私達は機関銃二挺
を据へ 援護射撃の準備をしてゐます
敵は私共の行動を知るのか知らぬのか盲弾
は足下に火花を散らし 時々戦火にほのか
に照し出された 右前方から流れる曳火弾
の弾道は 赤い火を引いて遙か左後方に飛
び去ります 私語り支那兵の聲は何か魔物
の私語にも似て聞えます 不意に鉄條網の
線に
「どがん／＼」
と 二発激しい爆音がして 先に拵敷の兵
の影が地に伏せたのを目撃しました
「ヤラレタ」皆は一斉に声を呑んだ と同
時に 左後方より「ター／＼」とか奇声を
発し一しきり激しい銃火は私達を包圍し
ました

誰かやられたらしく 苦しむような声が聞え
て来ます 破壊班の江藤上等兵です 敵は
其の声を目標に射つ 弾丸は足下にアスツ
／＼と刺り 坪根 川野の兩上等兵も相次
いで負傷しました 頸を貫通したらしい江
藤上等兵の苦しむような
「小隊長殿 江藤は笑つて死にます」
の聲が聞えました
「中隊長殿 班長殿 江藤は 喜ろこんど
死にます」
烈しい彼等の銃声の中に ともすれば杜切
れ勝ちな江藤上等兵の 悲壯な声は未だ絶
えませんが 呼吸の度に咽喉ががう／＼鳴つ
て苦しむようです
「しつかりせよ 大丈夫だ」
三重野小隊長殿は静かに傳えたが 既に死
を覺つたものか
「小隊長殿 班長殿 色々御世話に存りま

したし
そして最後に

「天皇陛下萬歳」

を叫んで意識を失ったのであります

彼の此の美しい最期は新聞や雑誌の英辭麗句にこそ飾られなかつたが、谷間の櫻花の

如く誇らぬ真当の尊き美しきがあり、彼も

定めし地下で満足の笑を漏らしてゐること

でしょう

彼が北支塘沽に於て、我が隊に編入されて

以来目立ちぬ存在の彼ではありましたが、湖

衆會戦に或は南京に向ふ追進に、疲れきつ

た露營の夕には必ず戦友の勞を、日頃愛用

の横笛を奏いて慰めてゐたと言ひます

噫、思ひ出の南京城攻略戦史の蔭に幾多散

華せし中に、一際美しい花と散つた江藤上

等兵の英靈よ、安らかに眠れと祈念して止

ませせん

雨花台の華

隊長最後の命令

歩四七ノ五 丸小野中尉

南京追進戦は軍旗中隊として進退しました

南京へ、南京へ、と行く途中各種の情報

が入るのですが、それによると四十七聯隊

は間に合はんとのこと、トラツクが約二

里位手前まで急進しますと、牛首山のとこ

ろで十三聯隊が激戦の最中で、それ以上進

めません

御蔭で自動車には乗つたし、よい休養が出

来ました

当時の中隊長は塘沽で来られたばかりの吉

田大尉殿でした。結戦で軍旗中隊は情け

ない。第一線を切願し、希望が達せられた時は雀躍りして喜びました。中隊は聯隊の右第一線、隣りの十三聯隊との戦闘地域が狭まると入り込む様にして戦闘しました。

その前、中隊長殿は小隊長以上を集め、筆記準備を命ぜられ、南京城攻壘に関する立派な命令を下されました。

中隊は今晚、南京の花雨台に向ひ前進する。敵は堅固な陣地に居るけれど、敗残兵が大半だから大したことはない。故

之を刺突しつゝ、前進せよ。そして自分の小隊は尖兵、途中地雷に注意せよと、細いところまで賢によく注意されました。之が最後の命令になったのでした。闇夜ではあるし、ぶつつかつたらそれまでと覚悟を定め、全兵肅々と行進を起しました。たが、何處からともなく砲弾が来る。小銃

弾が飛ぶんです。か何處からか判りません。よ、目標は雨花台にありとひたひたに迫り、拂曉を奪取、以て中華門占領の緒を造りました。この戦闘で中隊長殿は亡くなりました。

あの立派な命令を思ひ、やはり虫が知らせたのぢないかと思つたことです。

敵包圍下連絡に歸る

歩四七〇九 歩兵軍曹 飯田哲

昭和十二年十二月十一日の夜

中華門外旧兵工廠高地を占領せよ

との中隊命令に依り、小隊は同夜二十三時頃、中隊と別れ、該地攻壘に移り、二十四時頃には之を占領したのですが、斜面に段々

と建て、ある建物の一を奪取しても、又上の家屋内外には有力な敵が居り、手榴弾子エツクの乱射をしてみます

附近に炸裂する手榴弾は物凄く、隣りの兵と話すにも耳に口押当てる、話をわけ聞き取れない位です

そこで小隊長石田軍曹殿は家屋内より防戦することに決し、各部屋に兵を配置し、最も敵に近い窓には軽機を据えて應戦しました

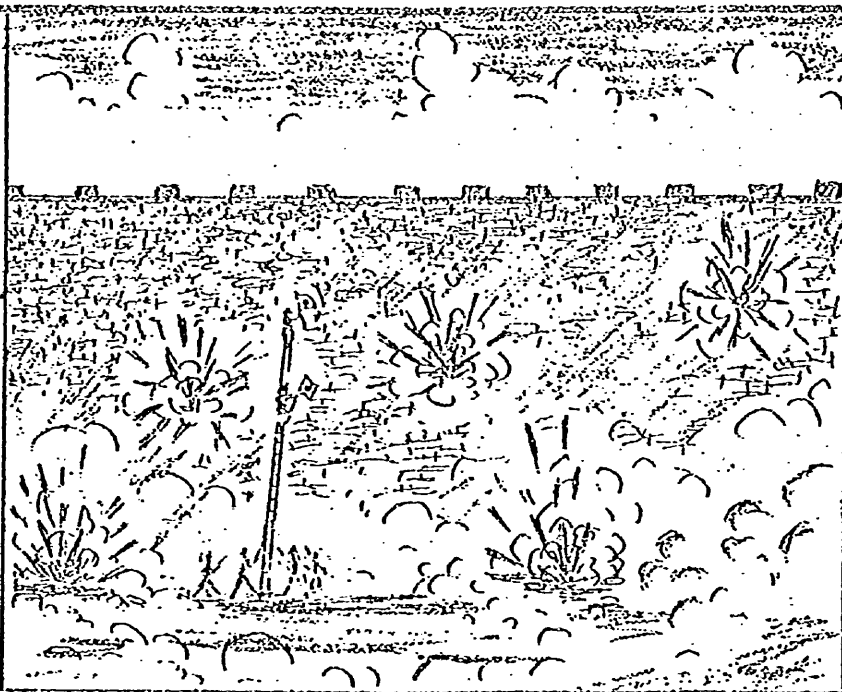
丁度其の時小隊長殿より「現在の状況を報告と、今後の行動等に就いて中隊に連絡せよ」と命せられましたが、時兵力も少く、私は死を覚悟で單身其の連絡に向ひました。何分中隊とは千米以上も離れてをり、暗夜に前進したこと故々つぱり道路が判りませぬ。薄覺の地形を便りに前進中、何處で方向を間違へたか橋に出来ました

見ると相当高い橋の様でしたが、暫らくすると豈間照準してあつたもの、如く正確な弾着は橋に飛び散り始めました。思はずだ、くしました。任務は重大です。寸時を争ふ連絡でしたので、よし当りは当れ、神に念じつ、全力を以て約三十米の橋上を強行突破しましたが、幸にも一弾も受けず、そして任務も遂行することが出来ました

其後小隊に歸る時は、別な進路に依り無事でした。翌朝知つたのですが、橋より四五十米向ふの丘には多数の敵が居つたのですが、よくも無事で任務を遂行し得たと、神の御加護に深く感謝しました

南京城攻撃

輝く一番乗



目次

- 一 當時を偲ぶ 歩兵大佐 緒方敏志
- 二 日章旗を揚ぐる迄 歩四七三 大尉 三朋保貞
- 三 混然一体となりて 歩四七三 大尉 吉田竹八
- 四 城壁に迫る 歩四七三 軍曹 長野明寿
- 五 中畑分隊長 歩四七三 伍長 川辺藤一
残弾の處置
- 六 敢然クリクを泳ぎ渡る 歩四七三 伍長 堤米一
- 七 城壁占領の前夜 歩四七三 本部 藤原誠會
- 八 南京よもやま 歩四七三 員 阪 鹿談會
- 九 愛馬は再び起たず 歩四七三 少尉 野中正己
- 十 南京病院の一夜 歩四七三 上等兵 松吉義胤
- 十一 谷間下のおことづけ 歩四七三 工藤 孝兵衛
- 十二 喜ぶ老母の姿 歩四七三 少尉 菊北 清

當時を偲ぶ

昭和十三年十月十三日附

福岡日日新聞ヨリ轉載

當時歩兵第百七聯隊第一大隊長

歩兵大佐 緒方敬志

城壁は断崖で高さ二十米もあり前にクリイワがあつて渡水なので

中華門の方へ来い

と電話がありました。然し折角此処まで

来て城壁を前にしながら他に廻り、他の部隊の聲について入城するのは残念です

第一線部隊も

構はず行きませう。何んとかして城壁まで

で行ませます

と奮ふので、門の方へは廻らず前進する

聲に決めました

砲兵も自分達の所へは撃つてくれなかつ

だがクリイワに行くど水が大分干いておます。兵は梯子を携いで飛び込んだが案外それが深く、皆溺れやうとしたのを漸く助け合ひました

その時之こそ天佑です。中華門の方から

小舟が一隻流れて来ました。早速兵が泳いで

で行つて之を持つて来ました。其の舟を滑

いで渡り竹の梯子を三つ継いで城壁に立て

掛けたがまだ足りず後は攀登りました

二人の決死隊長の内安東軍曹は戦死しま

した。之は熊本教導學校の良いた下士官

でした

城壁上に日の丸の旗を振つた時には、次

が出て良く見えなかつた。全く感激の極み

でした。後方に居て城壁に上るところなど

よく見え我々は全くはらくしりました

敵は前方と左右から逆襲し城壁上に居る

者の弾丸は盡さる。梯子を上る者も城壁手

前の左の部落から射つ敵の弾丸に仕れ

クリークを渡る者も出たれり。煙幕をたいたが駄目でした。一時はもう止めねばならぬかと思つた位、全くの死闘で附近は鮮血で赤く染りクリークを渡る者は血の舟の中に伏せておました。

皆生も死もなく唯我夢中でした。唯一塊の大和魂が突岳したと云つてもいい。せう。犠牲者に対しては全く哀悼の感に堪えません。



歩四七ノ三 歩兵大尉 三朋 保真

昭和十二年十二月十一日夕刻野山村に於て機関銃一ヶ小隊を配属せられ大士奄北方高

地の占領を命ぜられて、薄暮を利用し途の敵を駆逐しつゝ、大士奄南端に達し更に大士奄を攻襲して其地を確保しました。敵は其の夜敵回に涉つて夜襲して来ましたが悉く退却し、拂脱近く更に大士奄北方高地を占領しました。

これで愈々南京城攻襲の支踏點を確保したわけでありませう。

敵は掃蕩と共に猛烈なる迫撃砲の集中を浴せて来ました。

十二月八日次の如き大隊命令に接しました。

第一大隊命令

一 當面ノ敵情ハ日甚スル通り

歩兵第十三聯隊及二十三聯隊ハ聯隊

機テ同線ヲ保持シアリ 砲兵八聯隊ハ

島メ南門ト西南角トノ中間附近ノ城壁

ニスルヨリ機テ二時間ノ豫定ヲ以テ

突襲ヲ開始ス(以下聯隊突襲路上略

ス

聯隊ハ逐次前面ノ敵ヲ駆逐シ聯隊突進

路ニ接近シ城壁ヲ占領ス

以下略ス

二第一大隊ハ三里屯北方三〇〇方向ヨリ

聯隊突進路ニ突進シ城壁ヲ占領セント

ス

三第三中隊殺闘銃一々小隊属ス六逐次前面

ノ敵ヲ駆逐シ聯隊突進路ノ開設ヲ待ツ

テ城壁ニ突進シ六沙市東南端ニ亘ル間

ノ城壁ヲ占領スベシ

以下略ス

それで私は 右命令に基き取敢へず田上

高地に於て中隊を掌握し 攻進前進の命令

を下すと共に各小隊を区署しました

斯くて壮烈極りなき南京城強襲戦は開始

されたのであります

各小隊は二線に疎開し示せる順序に約百

米を聞き早速にて前進します

この時大隊重火器は一齊に射撃を開始！

中隊の前進を援護してくれました

田上部落に到着した時斜左より猛烈な機

関銃の側射を受け一時停止し配属機関銃

をして之を射撃せしめ その後設下に敗残

兵若干を駆逐しつゝ、鉄道線路まで前進しま

した

中隊の前進を見て機関銃も前進して来た

ので線路の側方迄之に位置せしむ前方の敵

に對し射撃を命じ、中隊は更に前進し之を

枚の所ろに進出しました

此処で阿部隊射をして城壁並にクリーク

の偵察を命じました

砲兵は砲んに城壁に集中射撃を為し破壊

孔の構成中でありました

私は附近の地物を利用して突進準備の為

め軍靴をゴム底及袋に履更へしめ 突進用

椅子の準備を為さしめました

や、へ阿部有候が帰來して

クリークは中五十米もあつて渡渉困難であ
り城壁は高さ約二十米にて所々壁に雜
木が生えております

との報告でしたので直ちに豫備隊の第二
小隊に渡河材料の蒐集を命じ 第三小隊に
豫備梯子及網の準備をせよとした

私は神田常長を伴ひ學校の二階に上り敵
偵察をしまはりましたが 砲聲は益々に
しておるのに破壊孔の構成は一向に進捗せ
ず 大隊本部に之迄の状況を報告すると同
時に砲兵射撃に關する連絡をとりました
工兵にも一應連絡にやりましたか くれ
は連絡がとれませんでした

この間中隊は全員有蓋を下し愈々輕装と
なり城壁攀登準備は完了しましたが 砲兵
の南門附近と城壁西南角に向ふ猛烈な集中
射撃にも拘らず その効果は極めて薄いも
のでした

この頃大隊本部から

第二中隊ニ援助ヲ命ズ 渡河材料ノ蒐集
ニ着手シアリ 重火器ノ準備完了

との通報がありましたか 敵情を視察す
るに 銃眼に據る敵は我が砲兵の射撃が極
烈な爲め殆ど其の影は見せませんか 破壊
孔の構成は未だ微々たるものです

そこで私は意を決し自ら突撃路を開闢し
ての突撃敢行を企圖し 次の如き命令を下
しました

突撃ニ関スル命令

一 敵情ハ既知ノ通り

第九中隊ハ右部落方向ヨリ前進中ナリ

第二中隊ハ中隊ノ右ニ此ノ學校附近ニ

在リテ中隊攻撃ヲ後助ス

第一機関銃及ビ第一大隊砲ハ後方高地

ヨリ突撃ニ協カス

二 中隊(機関銃一小隊附ス)ハ破壊孔ノ完成

ヲ待ツコトナク獨力其ノ中間部ヨリ突

撃シ城壁ヲ占領セントス

三、第一第二小隊ハ準備シアル梯子ヲ携行シ攀登スベシ

第二小隊ハ渡河材料ヲ携行シ渡河矣ノ準備ニ任ズベシ

四、第一小隊ハ右第一線トナリ部落右端方ヨリ攻襲シ壁上ヲ占領スベシ

五、第三小隊ハ左第一線トナリ第一小隊ニ連繫シ凹地左端ヨリ攻襲シ壁上ヲ占領シ左ニ戦果ヲ擴張スベシ

渡河順序ハ第一第三小隊ノ順序トス

六、機関銃ハ暫ク現在地ニ於テ前側ヨリ現出ヲ豫想スル敵ノ短刀火器ヲ求メ射撃スベシ

七、第二小隊ハ豫備隊

第一小隊ノ後方ヲ續行スベシ

機関銃及ビ擲弾筒ハ中隊長ノ許ニ差出スベシ

八、中隊長ハクリック南端ニ位置シ区署シタル後左小隊ト共ニ壁上ニ至ル

小隊長は真先に駈出し兵は遅れじと續きます

流石南京城攻襲の突進です。一同の勇氣は百倍し火器が梯子及渡河材料も軽々と早ヤクリックの葺岸に達しました

此の時不意に南門壁上の敵は機関銃の集中射撃を浴せて萎縮した。この爲め負傷者二名を出しました

取敢へず軽機一を以て之に當て、丁度其の時幸ひにもクリックの中央に川舟が一隻ありのを発見したので直ちに拾得を命じたところ中津留伍長以下二名勇躍して之を拾得して棄てた。此の時左川下部落より猛烈な敵の側射を受けた

そこで先づ舟候群を棄船せしめました。櫓も竿もありません。喧嘩の思ひつきで國旗を着けた竿が最早く岸を離れ對岸に滑り着けました

對岸に辿り着いた舟候から

左橋梁上より敵機関銃の側射を受け、
との報告がありましたが、この時中隊は
既に全部の軽機、擲弾筒で射撃中でありま
した。

次に舟の關係上梯子をどうしても渡せま
せん。その時水野上等は裸体となり第一番
舟の後を梯子を押し、水中に飛び込み、首尾
よく對岸に梯子を渡しました。

先着の舟は直ちに梯子を城壁下に運び
六名して掛け始めましたが、第一回は失敗に
歸しました。そして第二回目に遂に成功し
ました。この時粟津一等兵が右腕を貫通さ
れました。

もう此の時は、敵側防火は實に猛烈で雨
霰とはこんな状態を言ふのでせう。よくこ
れで弾丸が中らないと思はれる程飛んで來
ます。

然も沈着にして豪膽な第一中隊長安東康
文軍曹は、早く梯子を登り始めました。續

いで第二中隊長中津留伍長が登つて行きた
す。梯子の兩側は敵弾が城壁に命中して
パツパツと白煙が立ちます。

日章旗を銃に附けて登り行く舟の姿は
實に勇壯の極みでした。

然も其の梯子たるや城壁の高さ三分の二
迄しか達せず。

（其の上はどうして登るか、これは不成功
かな？）

と一瞬さう思ひました。か、どうせう安
東軍曹は梯子の上端より少し宛て登つ
て行くのです。

「おッやるな」と思はず呟きました。中津留伍長も同じ

経路を辿つて居ります。他から見えてゐる者
で誰かこの成功を祈らない者が居るでせう。

安東軍曹は木の根壁面に縋り半歩一歩と
徐々に登つて行きます。次第に頂上に近附
きます。あッ!!軍曹の手は銃眼に掛りまし

夫 勇氣を振つてヒラリと壁上に立上ると
日章旗を思ふ存分に振り始めました

遂に成功しました 南京城は遂に日本軍
の脚下に踏み躪られたのであります 時に
十二時二十分でありました

續いて中津留伍長登り着いて銃に附けて
あり日章旗を振つて萬歳を叫びました

先きに負傷した衆津一等兵は、この有様
を見て弁候としての責任を感じ再び攀登し
始めましたが、中途にして又も腹部を貫通
されて墜落し

残念ッ 眞鍋頼むし

と叫びました

こういふ風に余り左から側射を受けたの

でこの現状を大隊長に報告しますと、直ちに

第四中隊に攻勢前進を命ぜられ更に機関
銃大隊砲等大隊全火力を以て中隊の突進を
援助して戴きました

第二番舟にて壁下に廻り着いた第一小隊

は城壁占領と共に一背に萬歳を唱和しまし
た、そして逐次弁候兵は登り行き壁には
人数が増して行きます

城内に注意せよ

と下から呼びますと間もなく壁上から

逆襲ッ

といふ聲が聞えました

今迄壁下に在つて第一小隊の城壁攀登の

区署をしてゐた井上少尉は、之を聞くと急
據壁上に登り、見れば敵は兩側壁上及城内

より續々逆襲に轉じ更に家屋に據つて猛烈

な射撃をして來ます

事急なり躊躇を許さずと私は今迄左部落

を射つてゐた輕機三を呼び返し、神田曹長

に指揮せしめて救援に赴かしめました

渡河の際潜水及竿をやられ又負傷七名を

出しながら残り三名で強行渡河し、壁下に

駈寄り壁上より下した繩にて輕機を運びや
りました

此の時壁上では左方向より約七十名の敵が進襲して来たのです。尚城内には約百名の敵が壁下に向ひ家屋を利用しつゝ、三々五々前進中でありました。

安東軍曹は軽機が到着すると直ちに之等の敵を猛射し、其の逆襲を殲滅し逐次城内壁上より肉迫する勇敢な敵に對しました。丁度此の時不幸一弾が宮成一等兵の頭部を貫通したのを氣付いた真鍋一等兵が

「暫らくの辛持だ」

と摺り寄つた時又も一弾に真鍋一等兵は頭部を貫通されて即死しました。

これを見た安東軍曹は

「よしッ 仇は俺がとつてやる」

と軽機を射ち續けました。首藤上等兵が到着したので軽機を彼に譲り逐次家屋に居る敵に對しました。此の時安東軍曹は猛烈な反動を肩に受けましたので見ると一弾が銃口に命中してゐるのであります。それ

で兼ねて準備の拳銃を取出し奮戦してゐる時、飛來した一弾は軍曹の頭部を貫通して

「萬……」

の一言を残して壮烈な最後を遂げました。

續いて首藤上等兵も殲され、城内に騒ぐ敵は逐次其の数を増して来ます。軽機が到着したので一同の意気は凄

いものでありました。渡河の際背に一弾を受けた神田曹長は攀登困難な爲め壁下に在つて連絡及び昇登に著等に盡力しておりましたが、左側防火の熾烈なるに猛み續と船に繩を付け兩岸より之を引いて中隊の軽機残部と第二中隊の一銃を奪せ更に擲弾筒も運びました。

所が左部落の柱は頑強に退かず其の側防火は猛烈です。そこで煙弾抜弁を射射せしめ尚自石軍曹に煙幕の構成を命じました。軍曹は單身發煙筒四本を携行しこれにて構成し更に川辺の小屋に火をつけ藁を覆つ

て氷をかけ、發煙代用に努めてゐた所を側射に依り殲されました

この間を利用し引續き第三小隊長が小銃若干を卒ひて渡河し、壁上に攀登し來りました。それで壁上の一同も勇氣百倍して奮戦を續けました

壁下の小隊は突垂路が一筋なるは不充分と考へ、工兵が準備した梯子を送りました。クリークの所で敵火の爲めに保持困難となり、クリークに流しましたが、見西一等兵の独断処置に依り之を對岸に渡し、他に攀登路を構成しました。此の頃壁上では死傷者多数を出し折柄登り來た工藤軍曹が首藤上等の輕機を以て射裏して居りました

重傷を負ふた佐藤中村一等兵は自ら射裏することの不可能なるを知つて、他の戦友を勵ました。頑張つて居ります。第一回の敵の逆襲の時第一小隊長は頭部を貫通され、重傷の身でありながら右據桌にて頑張つ

て居ります

城内の敵は益々加はり右堆土並に正面家屋上に機關銃を据えて盛んに猛射を浴せて居ります

右壁上の敵は殲滅して其の影を見せぬがこの陣地は悉く敵に暴露してゐる爲め敵の射裏や逆襲を受け易いので前北准尉は直に掩体の構築に掛りました

然し敵弾は猛烈に飛來します。然も堆土後方よりは迫撃砲弾も交へて飛び來り、爲め城壁の銃眼部を破壊して掩体を利用することも出来ず、其の上城壁上の掘開も至難であります

所が幸に掩蓋銃座が構築してありましたので山下一等兵は此の中に入つて掩体構築に一生命でありました

敵は更に第二回目逆襲を敢行し來りました

然し嗚呼無念です。我々には早彈薬は殆

ど盡きかけてゐます

「おイツ 弾丸ッ 弾丸ッ」

と怒音を聲を洩らしします

敵の逆襲は實に勇敢であります。先頭に立つて向ふ將校など抜刀して突進し來り我が軍の銃火に墜されつゝ、も後から後からと近接し來ります

私は右方の突進路開設の要番を終ると壁の上に上り中隊も逐次兵力を増し小さいながらも掩体が出来たので心丈夫となり射撃を續行しつゝ、も尚掩体の増築を計り更に敵逆襲に備えて居りました

此の埵城内家屋及右の堆土より射撃を受けます。この時祥雲伍長が

「前の梯子から敵が登つて來ます」

と報告して來ました。然し鐵然として言

ひました

「逆襲は大丈夫 皆頑張れ」

既に彈藥は盡き器具や煉瓦を投擲する者

も出て來ました

この逆襲は最も激しく梯子を利用して來た者は手榴弾を投擲しつゝ、瞬間を利用して射撃します。それと呼應して城壁上の敵も又逆襲を開始して來ます

然し友軍の銃火に阻まれて仲々突入はして來ません。此の時正面射に依つて小川佐藤一等兵は戦死しました

私は更に右の方南門方向に對し池永上等兵以下三名を以て戦果擴張を命じました。幸ひ此の方の敵は肉迫して來ませんでしたが此の間にも豫備隊は逐次登り來り夫々中津留祥雲伍長及工藤軍曹の指揮に入。正面及左方向に戦果を擴張し其の地の確保に任ぜしめました

此の時の城內よりの射撃は最も激しく池永上等兵は頭部を貫通せられ一時閉鎖に絶命しました

又壁上の數回にわたる逆襲も皆よく頑張

つて之を兵退しました。特に中隊司令長及び
ご身に五弾を受けつゝ奮戦する様子を長は
悲壮そのものでありました。

斯くする頃にも右方の突進隊から援隊
及第二中隊の軽機も逐次登陸し右へ戦果を
擴張しました。

かくて壁上に軽機七銃積みこしたか、銃に
二銃は故障を生じましたので、何れもかし
て配属機関銃を一銃でも引上げやうと逐次
一等兵が勇敢にも壁上より吊上げんとした
時折第一弾で頭部を貫通され、壁下に墜
落即死しました。

この頃漸く彈薬の補充がつかない、全隊勇氣を
倍して奮戦しました。羽田警備隊の手など身
に二十五等の機銃を掃射し、攻込一等兵の登
銃まで腰にしま

よしッ 俄に……
と意気込んで登り始め壁上に現れた途端
胸部を狙撃されて

激戦……
と一言を返しました。
隊内の敵は尚も兵力を増して前進して来
ます。

中隊は全火力を以て之に對し、成程に敵
機銃十数発命中して、鋭く上る煙幕を弾
薬燃込に習かれました。

敵はさだく、燃せぬ勇氣にも城壁下に迫
り構子を登つて逆襲して来ます。然し其の
現には既に彈薬の補充がつかない、手榴弾は見事
命中し、砲兵と連絡をとつてからは遺跡は
射撃を止せとの命令が下されました。

一六〇〇、敵の進軍は西南角に激戦の聲が起
り、日章旗の輝きを見ました。
大隊主力も遂に右に誘引し、入り愈々中隊も
激戦を強くし、力尽き倒れました。

激戦の敵の一部は依然として退かず逆襲
を敢行して来ます。敵軍の壁上に増加す
るのを免ぐ何處となく攻撃の手も緩み、又

壁上の掩体も更に強化されました

夜に入り月影淡き壁上に忠魂永遠に眠る

十五勇士の霊を慰め 傷者を壁下に收容す

増大隊豫備隊の命令に接しました

思へば安東軍曹以下に依つて為された城

壁一角の確保はとることながら 血に染つ

て尚銃を執り且つ戦友を激励し城壁下敵の

猛火を浴びながら弾薬を運ぶ よく勇戦奮

闘して火敵を背にして敵回の迷霧を退けた

のは 唯 一致協力任務の爲めに萬策を盡

した賜に外なりません

今は亡き英霊に謹んで哀悼の意を表す

と共に當時を追懐してこの一篇を草する次

第であります

十 十 十

混然一体となりて

歩四七ノ二 歩兵大尉 吉田竹八

十二月十日午後より愈々南京攻夷の爲め

大隊は聯隊豫備隊となり 同日夕刻より四

級位に位置し敵砲弾の洗禮を受け彼我の銃

砲聲を聞きながら夜を徹しました

腹が凍つては戦さば出来ぬ と云ふか誠

に其の通りで 戦半開一番困る事は炊事を

することです

豫備隊の居る山脚に焼け残りの家が二三

軒あつた 突如で第一線の中隊が炊事して

ゐると敵の砲弾が火煙を目標に盛んに集中

して来ます、方々から

火を消せ 馬鹿野郎

火を焚けば砲臺を受けるぢやないか

と囁鳴つて来ます 其處は凹地で敵をか

ら火の見える筈はないのですか砲臺は依然

271

0726

止みません

翌朝になつて其の附近の櫓の木は大部分伐採つてあり點々残してある高い木は枝も皆切つて敵が豫め目標に準備してゐたのだといふことが分りました

道理で砲弾は其の切り残してある木を中心にして前後左右に落蓋しました 然し巧みに斜面や凹地を斜用してゐた部隊には一歩も命中しませんでした

十二月十一日一七三。垣安徳門附近を前進中吉田光治少佐の戦死を聞きましたので早速其の中隊の兵に案内して貰つて塹壕内に血に染つて散らさぬくぬる少佐の英霊を弔ひました

戦死の場所には南原城を眼下に見下ろす眺望絶佳の地です 十二月八日豊後中隊の長として貨物自動車に乘つて先行する際無言の裡に見送つたのが最級でした

大正十年機集の初年共として中隊に入隊

して以来夢の弟の様に可愛がつて教育し
将校になつて後モ隣りに住居してゐたので
公私共に因縁の深い間柄であります

象庭の事情もよく知つてゐるし今次の勤
員下令に當つては聯隊の勤員主任として寝
食を忘れて活躍し十一月十四日狂虎山附
近の戦斗中烈著したばかりで攻壘前より周
到に準備を整へ

南京一掃察りをすまじ

と部下を激励してゐたとか

それと南京城を眼下に眺んで戦死された
のだ 疾めし無念だつたでせう

十二月十九日少佐戦死の地に赴き附近に
敷設してゐた學寮の空襲に色鉛筆にて

吉田少佐戦死の地

と認めぬ少佐戦死直前ツ景況を寫眞に撮り
ました

さて其の夜中隊は大隊隊備となつて田上
南方高地東側本道上に位置し円形に陣地を

作つて警戒しました。右前には第九中隊左前には第三中隊が第一線として奮戦してゐます。

敵の砲弾は時々豫備隊の位置にも落下す

る。
二〇〇頃工兵隊は

爆薬をトラックに積んで其の儘中華門にぶつゝけるのだし

と元氣一杯で中隊の居る横の道路を前進しました

中隊よりは中畑伍長以下六名の弁候が大隊命令によつて南門前の橋梁及び其の附近の敵情偵察に出ておました

其の後増くして〇〇部隊が前進して來ました。そして

「此の道路は南門に通ずるか」

と訊ねるので

「何處に行くのだし」

と聞きますと

「南門より入城するのだ」

と答へます

「すぐ前方には未だ敵が頑強つておる筈だ

線は战斗中で入城などは出来ぬ

と敵へたけれども懲りとして前進しまし

た

約二百米も前進したかと思ふ頃敵の射撃

を受けて先に通過したトラックも今行つた

ばかりの〇〇部隊も引返して來ました

と

んな間違ひだつたのでせうか。さるで敵首

都を攻撃してゐるのに自分の兵營に野營か

ら歸つて來たやうな気分です。然し此の意

氣あつてこそ容易に占領出來たのだと思ひ

ました

十二月十二日依然大隊豫備隊として第二

第四中隊を指揮して。九三〇前進を起し。進

路偵察の爲めに湯淺濠畔と當番を連れ

て。前の後線に先行して眼鏡で敵情を視察して

おますと。狙撃を止めたりで直ぐ位置を裏

へて伏せました。所が今度は砲夷を受けて爆煙に被はれてしまつた。其の時不覺にも

「嗚呼やられた」

と云つて後へ退つたので湯浅准尉は

「中隊長殿」

と駆け寄つて来たが土を被つただけでした。

た

それからの前途は敵の交通壕を利用して暫く行つたが、積蓋銃座で出るこゝが出来ない。銃隊から左歩兵第二十三聯隊方面を見ると連続せるクリーク地帯で敵の砲弾はクリークの中に炸裂して水煙は七八米も上り空に染いものです。

銃隊を煽動して背袋を下し一人宛這ひ出て行きませした。

一〇〇。中隊は右第一線として第三中隊の右に増加を命ぜられ、竹原小隊は急速に師範學校に進出してクリーク南側を駆走中の敵を射撃して之を殲滅しました。

第一小隊と連絡した湯浅准尉は工兵小隊長より

「前方のクリークには水は無い」

と云ふことを聞いたので直ちに大隊長に報告させました。事實は湯浅の出来ないう大さなクリークがあつたのです。

師範學校で敵を殲滅した竹原小隊は意氣軒昂今にも城壁に飛びつきさうにあつたのです。城壁攻塵に就いては詳細なる命令が出てゐるので私は其の前進を抑制しました。竹原少尉は地面を踏んで齒痒がりました。

其の頃城壁下に友軍の斥隊を認め、そしてその斥隊は梯子を城壁に立てかけ、居る直に情況を大隊長に報し、大隊長に速に師範學校に進出するやう意見を具申しました。

この間中隊は廣瀬小隊に梯子を準備させ背袋を師範學校に下して器具を外し前進の

準備をしました。緒方大隊長は直ぐ來ら
れたので師範学校の階上より現地を指示
して情況を報告しました。

丁度其の時銃に目の丸を附けた第三中
隊の舟は梯子を登り始めました。と水
を目密された大隊長は

「第二中隊前進
と命ぜられ自らも直ちに前進せられまし
た。

中隊は決河の如き勢ひを以て第三中隊
の舟候を目標に急進しました。城壁南側
には大きなクリークがありました。

第三中隊は一隻の舟で渡河中であつた
が城壁西南角附近及其の西方部落より側
射せられ夏傷者が續出しております。

大隊本部も中隊もクリークの南岸に突
進して來たが舟なくては渡れません。大
隊長は

「第二中隊は西南角の敵を撲滅せよ」

と命ぜられたので第一小隊を第三中隊の
左に増加し、更に

「煙幕を構成せよ」

と言はれたので直ちに煙幕を發射し城
壁下に炸裂はしたが、弾数少く其の効果は
充分ではありませんでした。

第三中隊の梯子は城壁上縁まで届かず
側射は受けられ犠牲者は出るといつた有様
です。

大隊長は

「第二中隊は早く梯子を對岸に送り
と叱咤せられます。梯子を繋いでクリー
クに浮べたが流されてしまふのです。私も
聲を囁らして第三小隊を督勵しました。

第三小隊長廣瀬少尉は敢然武装の儘
「俺に續け」

と身を挺してクリークに飛び込み、抜きを
切つて泳ぎ始めた。間髪を入らず傳令加藤
上等兵及び二宮伍長の指揮する五名は各々

約三米の梯子一個宛を持つてクリークに飛
び込みました。武装の儘の氷行は極めて困
難です。然も敵の側射は激しく、加藤上等兵
は八分目位の所で遂に胸部貫通銃創を受け
河中に沈みました。私はこの状況を目撃し
気も狂はんばかりです。

廣瀬少尉も力盡きたか敵弾の雨と飛來す
る水面に浮きつ沈みつして泳いでゐたが
幸ひ對岸に居つた第三中隊の兵の援助を受
けて辛うじて泳ぎ着きました。

そして死角に這ひ寄り伏せた儘上手を丸
く振りながら私に合図しました。

二宮分隊は負傷者を出し、又全く泳げな
い者もあつて溺れんとする者あり前進は出
来ません。と水を見た伍長中畑初美、一等兵
瀧野行利、後藤鶴見の三名は素早く裸体とな
り、クリークに飛び込んで負傷者及び溺水
者を救助しました。

第三中隊は一隻の舟によつて逐次渡つて

おたか、負傷者續出し城壁占領の弁候も極
めて苦戦しておます。第三中隊より

輕機二ヶ分隊を舟によつて渡らせ、くれ
どの依頼があつたので第三小隊の輕機分
隊に命じたが、二ヶ分隊は渡水ておたかの吉原
尚一上等兵の下分隊だけが渡河しました。

城壁占領弁候は敵の逆襲を受け次第に城
壁の此方側に移りつ、あり、梯子によつて
登りつ、ある者は射ち落さるゝし、河岸に
は大隊本部及中隊が密集しておたかの中隊
は残り二ヶ小隊を台上に展開させ、工事之急か
せ萬一の場合に備へるべく、全力を盡して準
備しておたか所、大隊長より

「第二中隊は何をしてゐるのか、早く西

角の敵を攻ませよ」

と嚴命されたので直ちに西角に向つて
攻勢前進したが、クリークは渡河出来ず且
つ側防陣地は西角よりクリークを隔て、
其の四方の部落でした。

左歩兵第二十三聯隊は未だクリークの線には進出しておらず、友軍の重砲弾は城壁に命中し物凄しい音を立て、炸裂し、左聯隊正面の破壊口は逐次に構成されて、工兵隊は河岸に躍進して架橋を開始しておました。敵は城壁上より盛んに射撃しておます。暫くして歩兵第二十三聯隊と連絡がつかず、中隊主力は家屋を利用して此の敵を射撃しました。

先に渡河した廣瀬少尉は吉原分隊を指揮して第三中隊の梯子の東側に急造梯子を立て掛けた城壁上に登り、第三中隊の右方に陣地を構築して右方城壁上及城外の敵を射撃し、且つ中華門方向より来た敵度の遊襲に對し廣瀬憲二少尉、吉原尚一上等兵、堤米一上等兵、谷口亀夫一等兵、永野勇一等兵以上五名の寡兵を以て陣地を固守し敵約三十名を殲し完全に第三中隊の右側を掩護したのであります。

谷口一等兵は最初左臂部に首管銃剣を受け、け次いで右臂部に手榴弾破片剣を受けたけれども、一歩も後退せず奮戦して其の夜野戦病院に收容され、南京城占領の喜びを味ふことなく、二月十六日戦傷死したのですが、誠に気の毒に堪えません。

命令に依つて、中隊は第三中隊に小円匙二十五、小十字鍬四を貸與し、小銃弾薬一千発を融通したが、何んだか手足を取られるやうに感じました。

更に、竹原小隊を以て土嚢袋を作製し城壁上に補給するやうに命ぜられたので、竹原小隊に命じたが吊上げが困難で僅か六個しか作れませんでした。

竹原小隊も城壁に登り第三中隊の左に連繫して掩体を構築しました。

中隊主力は

一時渡河表南側台地ヲ占領シテ四周ニ對

シテ警戒セヨ

と命ぜられ水たので工事を始めてみた所も
更に城壁上占領を命ぜられ第三中隊と文
代し 昇口より左を占領し城壁を壊して掩
体を作り逐次陣地を延伸して歩兵第二十三
聯隊に連絡して至急に警戒しました

大隊は二個の掃子によつて上下するので
大変不便だつたので 左の破壊口を通らせ
て貫通うと思つてお願ひをしたがどういふ
譯か聞き届りてくねなかつた 諾らん個人
の感情によつて協同を欲ぐやうなことがあ
つては誠に申し譯ないことだと思ひました

翌十三日一三〇より中隊は南京城南郊区
城の掃蕩をやつたが 昨日戦死した加藤正
亀上等兵の死体が分らないので廣瀬少尉以
下十名をして捜索させたが夕方までに未
頭発見出来ず 自分は加藤上等兵の戦死は
目撃したが死体が無くは遺族の方に申し
譯ないと其の夜も眠れませんでした

翌十四日更に廣瀬少尉以下八名をして

故加藤隊長の死体を捜索させました (一三〇)
死体を発見したとの報告があつた時は本營
に嬉しかつた

一五〇から城壁上で聯隊の遺体があつ
て長谷川聯隊長より訓示をいたゞいた時は
感慨無量でした

城壁に迫る

歩四七二 歩兵軍曹 長野明春

一睡も出来なかつた夜が明けました
愈々今日は総攻勢です

夜明けを待つてゐたかのやうに戦車が前
進して来て車上から軽機で射撃し出しまし
た

食は昨日の晝まで、後は何にもありません

ん 空腹と寒さを凌ぎながら皆壕の中に入
つくまつて前進命令を待ちました

午前十時 中隊は右第一線にある南京攻
害の第一線をうけたまはることが出来まし
た 十二日間急行軍の甲斐がありました
皆得心の笑と悲壮な覚悟を新にしました

砲弾を避け小高い山に登れば豪華な南京
城が直ぐ目の前に展開します

砲弾が盛んに落ちるので山を越えて前進
することは困難です 幸ひ後線に敵の掘つ
た交通壕がある之を利用して前進しますと
五百米ばかりの地裏に人家があります そ
の後方から砲兵が城壁に向つて猛射を浴せ
ておきました

やつと前線に進出して部落を掃蕩しなが
ら前進 鉄道線路に出ますと猛烈な側射を
受けましたので各個前進して向側の部落に
入りました

右の方に居た工兵の小隊長殿が

城壁の手前に敵が三中隊居ると
と敵へてくれまじたりで直ちに小隊長殿
に報告しました

此の時左第一線の第三中隊は鉄道線路の
所に居ました

「良しッ先に行つてやらう」

といふやうな気にはつて我が小隊は前の
学校に入り煉瓦作り学校の二階り上ります
と敵が直ぐ目の下に居ます 城壁の手前の
クレーター附近に右往左往して居る

距離は約三百米です 小隊長殿は即座に
射撃命令を下さる 階上から狙撃し猛射
を浴せす 狼狽した敵は逃げまどうばか
りです

實に痛快です 空腹も何も忘れて射ちに
射ちまくりました 一人で七八十発射ちま
した

背囊を此處に置いて前進すると 城壁に
は第三中隊の決死隊が梯子をかけておきます

四十尺余の城壁です。梯子は未だ城頭まで
一間半も足りないので、その水を登つて行くのが
見えませす。壮烈言語に絶するものがありませ
す。

クリークを挟んで左方を警戒しつつ、手に
汗して成功を祈る。感激の涙で目が見えな
くなりました。

三人、四人、五人と登つて行く。成功です。
城壁上に高く日の旗が打ち振られ来ました。

中畑分隊長

残弾の處置

歩四七ノ二 歩兵伍長 川辺藤一

城壁外に移動してゐる敵を発見して
一人も逃すな
と学校の二階から猛射を浴せたが、気持の

良い程中りました。文字通り敵は将棋倒し
三十分位の間に悉くやつ、けました。

この水で百数十里膠の切れるやうな思ひを
して持つて来た弾も極めて有効に使甲され
たわけですよ。

壁上の敵はかなはじと西方へくくと逃げ
出しましたので。

「今だ 南京城を奪つ取れ」

と薄装束になり学校を飛び出しました。

中畑伍長は銃に日の丸を附け

「之を城壁に立てるんだ」

と先頭に進みました。

気早やかな兵隊は早クリークに飛び込みま

す。第三小隊長殿も渡つておられ来ましたか、停

止命令は如何ともすることが出来ません

我々は三明隊のクリーク渡河城壁占領後

議の爲め左方に移動し、突入を防止せんと

して側射する敵を制圧いたしました。

三明隊に依つて占領された城壁の一角を

も協力確保して戦果を拡大し夜を城壁上に
徹しましたが此の戦斗で常に先頭で勇敢
に奮戦した我等の分隊長中畑伍長は遂に重
傷を負ふて倒れられました

重傷の身でありながら

「第三分隊 一番乗りだぞ しっかりとやれ」

と全員を激励し

「御世話になつたなア」

と禮を言ひ 射ち残した残弾を自分から
出して

「この弾丸で仇を取つてくれ」

と渡される その沈着な處置には心から
頭が下りました

敢然クリークを泳ぎ渡る



歩兵伍長 堤 米一

彼我の銃聲等は耳を劈くばかり 敵弾は

容赦なく雨霰と身辺に落下します

「ふよいと前方を見ると城壁下に早や勇敢な
兵が数名梯子を立てかけて登らうとしてお
ます

「残念 一歩遅れたか」

と気は焦水と前面のクリークは水が深く
て渡渉は困難です

「小隊長廣瀬少尉殿は（猶命せば不利）と
見られたのか敢然クリークに躍り込まれ對
岸目指して泳ぎ渡られました

遅水てはならぬと兵隊もこの水に續きまじ
たが敵の側射に次ぎぐに倒れまじした
間もなく中隊長殿の命令で三小隊の軽機
分隊は三中隊の舟でクリークを渡り廣瀬小

隊長殿の指揮下に入ることになりました

城壁下に辿り着きまじすと三中隊の一小隊
位が来ておまじしたか仲々城壁には上ら水
ない 何しろ梯子は一本その頂上迄には敷
米足らぬといふ食弱な梯子でした

城壁上の決死隊からも

早く上れッ 上れッ

と怒號する声かします

漸く別の梯子が一本用意されましたので

小隊長殿を先頭に分隊長、射手、第一彈藥

手の順に登りました 登り着くと同時に射

つて射つて射ちまくりました

逆襲の敵が殲滅する 原隊も殲滅する さう

した中で彈丸が後々少くなるのが一番気懸

りでした

小隊長殿は危険を冒して

彈丸を上げろッ 彈丸を早くッ

と連呼しながら城壁上を駆け廻らぬまじ

た 中隊から二回彈藥が補充された時は

これで良い

と心丈夫に思いました

そして生きる死ぬまといふことなど少し

も念頭になく 唯へ聲援よ故障を起してく

ぬるな」と心で祈つて居りました 日増余

り手入もせず埃と泥だらけにして置いたく
せに勝手がなもつです

然し神佛の加護か千四百發の射量間一

回の故障も起らず 遠慮なく後能を發揮し

て逆襲の敵を殲滅することが出発した

城壁占領の前後

歩四七ノ五本部 座談會

梶原上等兵（聯隊砲）

誘言の様に吐いて迫り着いた南京城壁を

五百米の所に望んで中隊は砲四門を据え

朝から午後二時頃迄五百發以上の彈を射つ

たのは十二月十二日の事でした

師團司令部から

よくやつてくれ

と激励の電話がかつたとかで皆気を良

くして居ました

夜の十時頃でもあったので、突然、中隊指揮班に炸裂した一発の砲弾が附近に落ちた。明日の南京入城を夢見ておた衛生兵が、身体に大きな穴を開けられて

うむ

とも言へずに斃されました

怒髪天を衝くとはこの事が隊長殿も立腹

されて

すぐ尊龍を地下足袋に履代へて砲を城壁

上に引上げろ」と言はれました

クリークは工兵隊の小舟で分解搬送し今

は一同必死の覚悟を分解した砲を背負ふて

上げることには待つておますと、既に城壁

は皇軍に依り完全に占領され、唯工兵隊の

物凄く爆破作業を見ただけでした

井上少佐（當時聯隊砲中隊長）

いや地下足袋に履き代へさせたのは斯う

小譚だよ

揚子は地下足袋の踵に聯隊命令で中隊の砲を二門城壁の上に上げて、城内掃蕩の援護をせよと言はれたんだ。こりや決死隊だよ

目標になり易い城壁の上に砲を据えるなんて然も附近には敵が居るものと思はなくてはならない

一つ一つ分解して上げて又其れを組み上げて初発を射てるやうになる筈にはどうしても犠牲者が出る。動作を犠牲にする為にも地下足袋と代え方が良い。さう思つて代

へさせたんだ

若しあの時の俺の命令が腹立ちまじりの砲引上げと受け取れたとするとそれは誤りだとして、可愛い、部下をみすみ

す死地に追ひ込ませ親の心の苦しい所ろだよ

ハハハハハ

後藤義雄軍曹（九中隊）

丁度十二日の晝南京占領をいたしましたか

當時自分は小隊長當番として傳令に服して居りました

傳令に出されて任務を果して小隊に帰らうと探したが分りません。ウロク／＼しておます。選良く小隊の兵隊に逢ったので宿舎を訊いて帰途につきました

其の時自分の眼に跌じたのは騎兵の大尉殿が長い軍刀をガ／＼／＼はせて藁を一生懸命集めて居られたのです

馬を持つ將校の方のこの床しい姿を自分は振り返り／＼／＼何んとも言へぬ氣持で見ながら帰りました

日名子正曹長（當時北中隊）

十二月十二日の朝中隊は左第一線になつて大士巻から三里店、中華門の西方城壁を攻撃して三中隊の援護をすることになつておきました

石田曹長の指揮する第一小隊と自分の第



二小隊とが中隊の右第一線でしたが、大士巻の川辺で猛烈に敵火を受けらるゝので急遽三里店に進出。石田小隊は此の部落を利用して前進しました。自分も小隊は城壁の西南端から猛射を受けて前進不能になりました

此の時中隊長安部大尉殿は師範学校の二階からこの状況を見て居られました。此處にも盛んに敵弾が飛來するのです

石田小隊は敵火の閉断を利用して遂次前進。遂に中華門の直前まで進出し、これに呼應して自分の小隊もククリクの線まで前進しました

これでククリクの線に居た敵は殆ど殲滅しました。後で見ると此の附近には約二百五十の敵死体が轉つておきました

十
十
十